

通勤電車のあの人は、俺の前で だけ人妻の顔をほどく ー毎朝同 じ車両、痴漢から助けた縁で始 まった秘めごとー

毎朝同じ車両で見かけるだけだった品のいい人妻。痴漢から助けた縁で言葉を交わすようになり、夫に顧みられない彼女が、年下の俺の前で少しずつ崩れていく、通勤路の背徳純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

毎朝七時四十二分の急行に乗る人は、みんな立花 恵を
「隙のない奥さん」だと思っている。

きちんと折り目のついたコート、まっすぐ伸びた背筋、誰とも目を合わせずに窓の外を見る横顔。混んだ車両のなかでも、彼女のまわりだけはいつも静かな余白があるみたいだった。三両目のドアの脇、いつも同じ位置に立つ、品のいい人。声を聞いたこともない、名前も知らない——半年前まで、俺にとって彼女はそういう人だった。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のとろみが、間接照明だけの寝室に満ちていた。カーテンの隙間から、遠い街明かりがにじんで入ってくる。電車の走る音も、改札の喧騒も、ここには届かない。世界からそっと切り取られたような部屋に、二人のほかには誰もいなかった。

毎朝、何百人もの人を乗せて走るあの電車のなかで、俺たちはただ、すれ違うだけの他人だった。同じ時間、同じ車両に揺られながら、声をかけることも、名前を知ることもなく、別々の駅で降りて、別々の暮らしへ帰っていく。

そういう関係だったはずの二人が、今、こんなにも近くで、互いの体温だけを頼りにしている。そのことが、まだ少し、信じられないでいた。

昼間の恵を思い浮かべる。ホームの端でまっすぐ前を見て電車を待ち、混んだ車内では誰にも触れまいと身を硬くして、降りる駅では人波をすり抜けて足早に改札へ消えていく。すれ違う誰もが「きちんとした人だ」と思うだろう、あの冷たいほど整った佇まい^{たたず}。左手の薬指には、細い指輪。彼女には帰る家があって、待っているはずの夫がいて、俺の知らない暮らしがある。

改札の向こうの世界では、誰も、この夜のことを知らない。同じ車両に乗り合わせる通勤客も、彼女の夫も。みんなが信じている「隙のない奥さん」が、今、毎朝ホームですれ違うだけだった年下の男の腕のなかで、なにもかもをほどいていることを。

その唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……大樹くん^{だい き}」

肩までの黒髪が、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていった。いつもは涼しげに伏せられている切れ長の目もとが、今は潤んで、すがるようにこちらを見上げてくる。薬指の

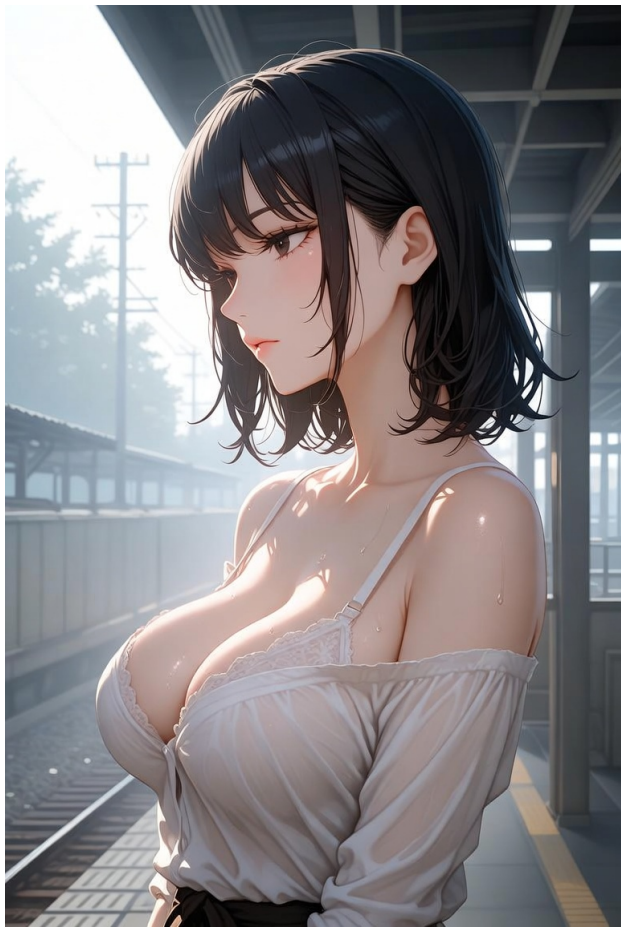
指輪が、間接照明をにぶく弾いた。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させる。

三つ年上のこの人を、俺はずっと遠くから見ていただけだった。声をかける勇気もなく、ただ毎朝、同じ車両のいつもの場所に彼女がいることに、ひそかに安心していった。あの頃の俺には、この人がこんな顔をするなんて、想像もできなかった。

ホームの端でまっすぐ前を見て電車を待つ「立花さん」。混んだ車内で、誰にも触れまいと身を硬くする「立花さん」。近所でも、職場でも、きっと「しっかりした奥さん」で通っているのだろう、あの人。その隙のない仮面の内側に、こんなにも淋しくて、こんなにも熱いものを抱えていたなんて、毎朝すれ違っていた俺だって、ずっと知らずにいた。彼女自身さえ、忘れたふりをしていたものを。

その完璧な横顔が、今、俺の手のなかで、音もなく崩れていく。

毎朝すれ違うだけだった俺の前で、恵はもう、なにひとつ取り繕えずにいる。



——ここから先は製品版でお楽しみください——